

## 嫁ごろしの田（山東町）

今の山東町〈さんとうちょう〉、楽音寺〈がくおんじ〉部落から竹田の筒江〈つつえ〉という部落に通じる、さびしい山道を、宝珠峠〈ほうじゅとうげ〉といい、その峠をずっと登りつめた所に、四反〈たん〉（四十アール）あまりの大きな田があります。

その山田のことを、土地の人は嫁ごろしの田とよんで、古くからの因縁〈いんねん〉話を伝えています。

昔、楽音寺部落に、大変がん固な、いじ悪な姑〈しゅうとめ〉（夫の母）がいました。ある日のこと、この姑が若嫁〈わかよめ〉をつれてこの峠にやってきました。そおしてあの一番大きな田を指さして、いいました。

「きょう中にこの田〈たん〉ぼを一人で植えてしまえ、日が暮れんまでにするんだぞ。」

と、いぢ悪そうにいつけると、さっさと家に帰って行ってしまいました。若いお嫁さんは、姑のいつけどおり、一生懸命になって田植をやりはじめました。昼の弁当も忘れて働きましたが、なかなか仕事は、はかどりません。日も段々西の空にかたむきはじめました。

ふと気づいてみると、一羽の鳥〈からす〉がいつのまにきたのか、田の中におりてきて、あの大きな嘴〈くちばし〉で苗をつまんで、ちょい、ちょいと器用〈きよう〉に植えてくれています。

「ああ、助〈たす〉かった、これで仕事もはかどったろう。」

と、股〈また〉ごしに後の方をのぞいてみると、なんとまだ半分も植つけがすんでいませんでした。あまりのことに驚いた嫁は、「うーん」と後にひっくりかえってしまいました。

冷たい山田の深い泥土の中にごろんだ若嫁は、とうとう生きかえらなかつたといひます。

その後、この田のことを、村の人はいつとはなしに、

“嫁ごろしの田”

といひて、だれ一人として近づこうとしませませんでした。とりわけ竹田方面に嫁入りするときは、決してこの峠は通りませんでした。

もし万一〈まんいち〉、何かの事情でこの峠を通らなければならないときは、その田の周囲を縄で張りめぐらし御幣〈ごへい〉（神かざり）をさげて、清めてからでないとは通らなかつたといわれています。

